

鶴見岳・伽藍岳の火山活動解説資料

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

＜噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ＞

伽藍岳では、本日（8日）02時47分より山体を震源とする火山性地震が多発しています。

伽藍岳では火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

【防災上の警戒事項等】

伽藍岳の火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

噴火時には、風下側で火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

○ 活動概況

伽藍岳では、本日（8日）02時47分より山体を震源とする火山性地震が多発しています。06時までに61回発生しています（速報値）。震源は伽藍岳東側の深さ1～4km付近に分布しています。

噴煙の状況や地殻変動には特段の変化はありません。

また鶴見岳付近では、本日に入って、火山性地震は観測されていません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学及び十島村のデータも利用して作成しています。資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています。

火口から概ね 1 km

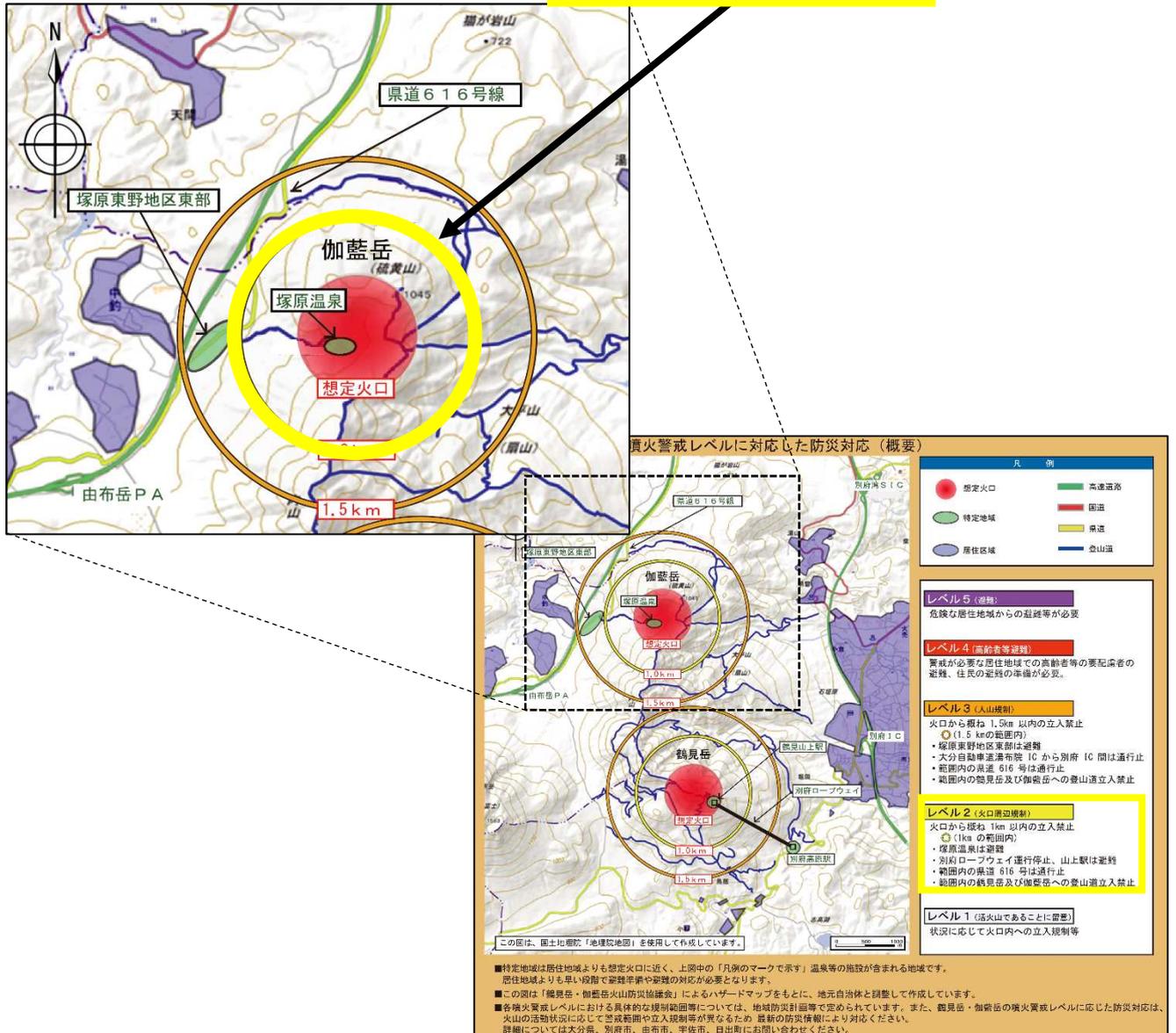


図1 鶴見岳・伽藍岳 伽藍岳の警戒が必要な範囲

伽藍岳の火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

噴火時には、風下側で火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

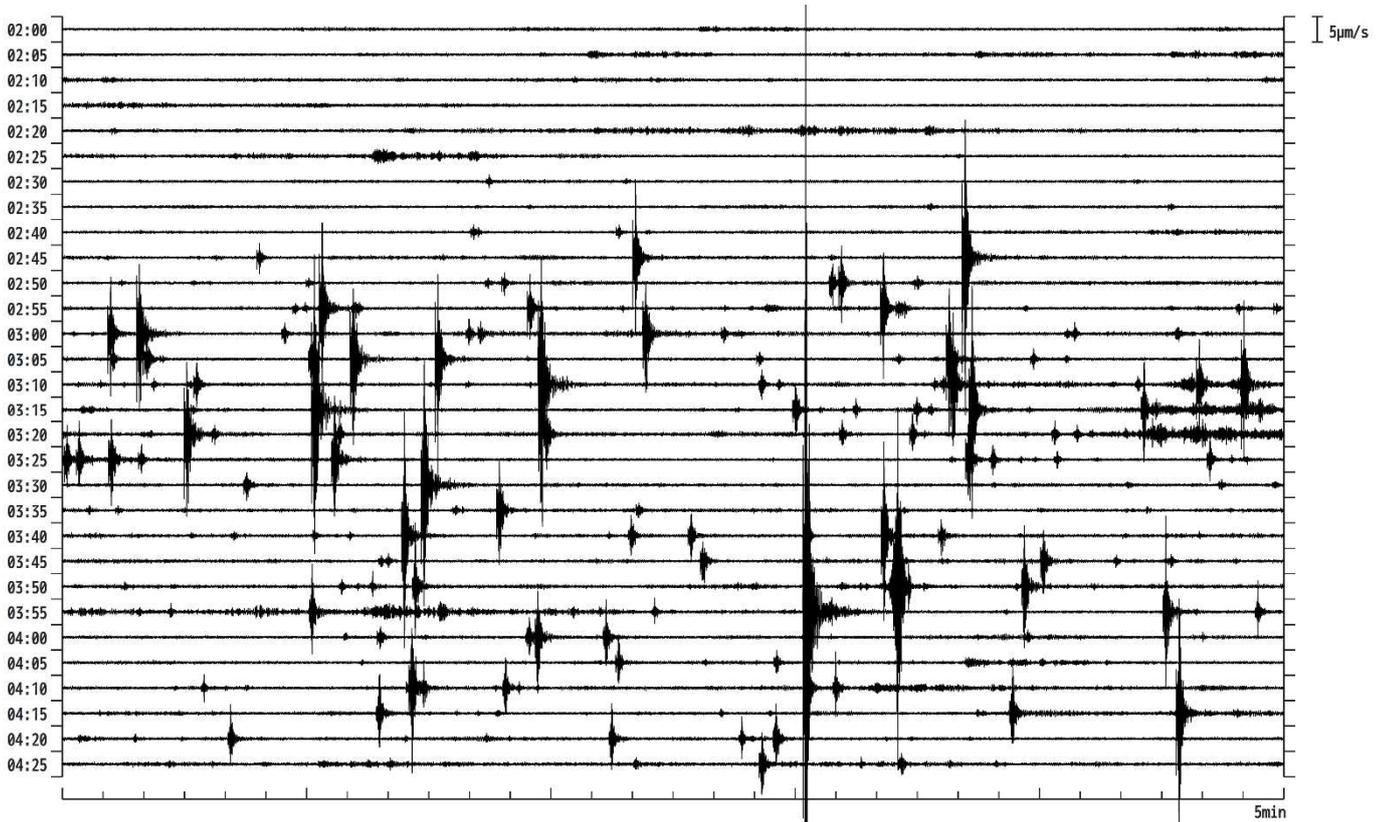


図2 鶴見岳・伽藍岳 火山性地震の発生状況（湯山観測点、7月8日02時00分～04時30分）
伽藍岳では、本日（8日）02時47分より山体を震源とする火山性地震が多発しています。

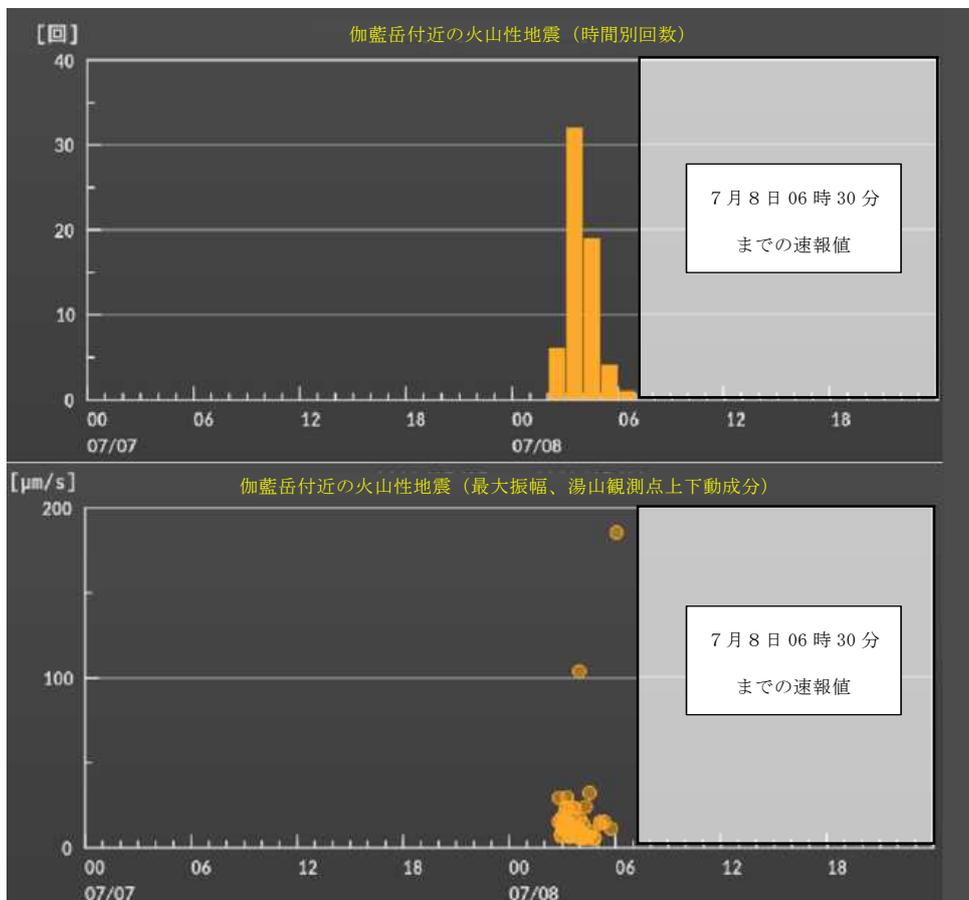


図3 鶴見岳・伽藍岳 伽藍岳付近の火山性地震の時間別回数、最大振幅（湯山観測点、上下動成分）
（7月7日00時00分～8日06時30分（速報値））

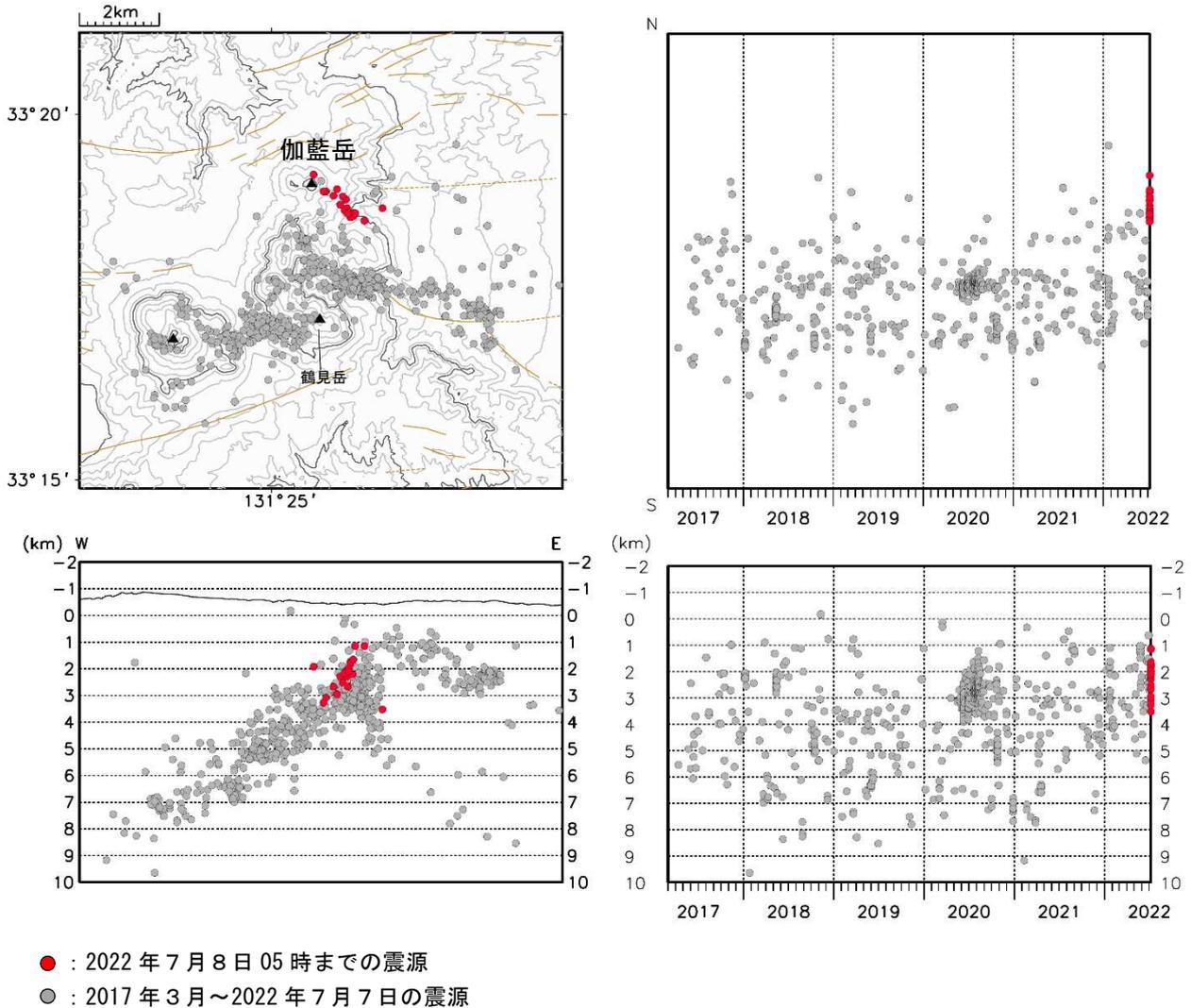


図4 鶴見岳・伽藍岳 震源分布図（2017年3月～2022年7月8日05時（速報値））

震源が求まった地震は、伽藍岳付近の東側、深さ1～4kmに分布しました。

山体周辺及び山体下の深さ10kmまでの地震を表示しています。

近傍の観測点（湯山、日ノ平、内山北尾根、鶴見岳西山麓）において、P波とS波の到達時間差が概ね1秒以内の地震を掲載しています。

2017年3月24日の鶴見岳西山麓観測点の整備により震源決定の精度が向上しています。

茶色線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示しています。

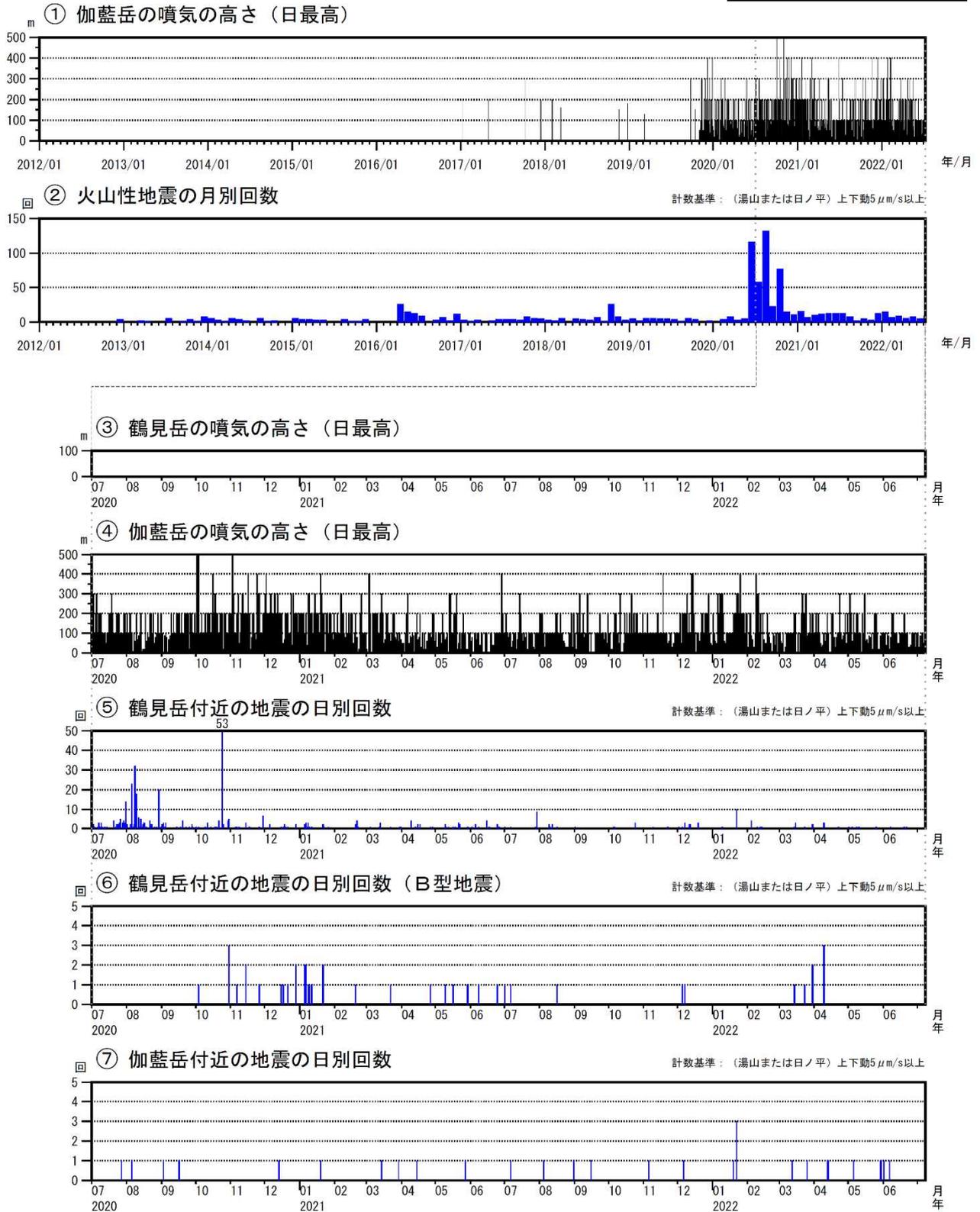


図5 鶴見岳・伽藍岳 火山活動経過図（2012年1月～2022年7月7日）

＜6月～7月7日（地震増加前）の状況＞

- ・大分県監視カメラ（石垣）による観測では、鶴見岳からの噴気は認められませんでした。
- ・塚原無田監視カメラによる観測では、伽藍岳からの噴気は最高で噴気孔上 200mでした。
- ・火山性地震の月回数は少ない状態で経過しました。B型地震は観測されていません。

※1 伽藍岳の噴気の高さは2019年11月より塚原無田監視カメラにより計測しています。

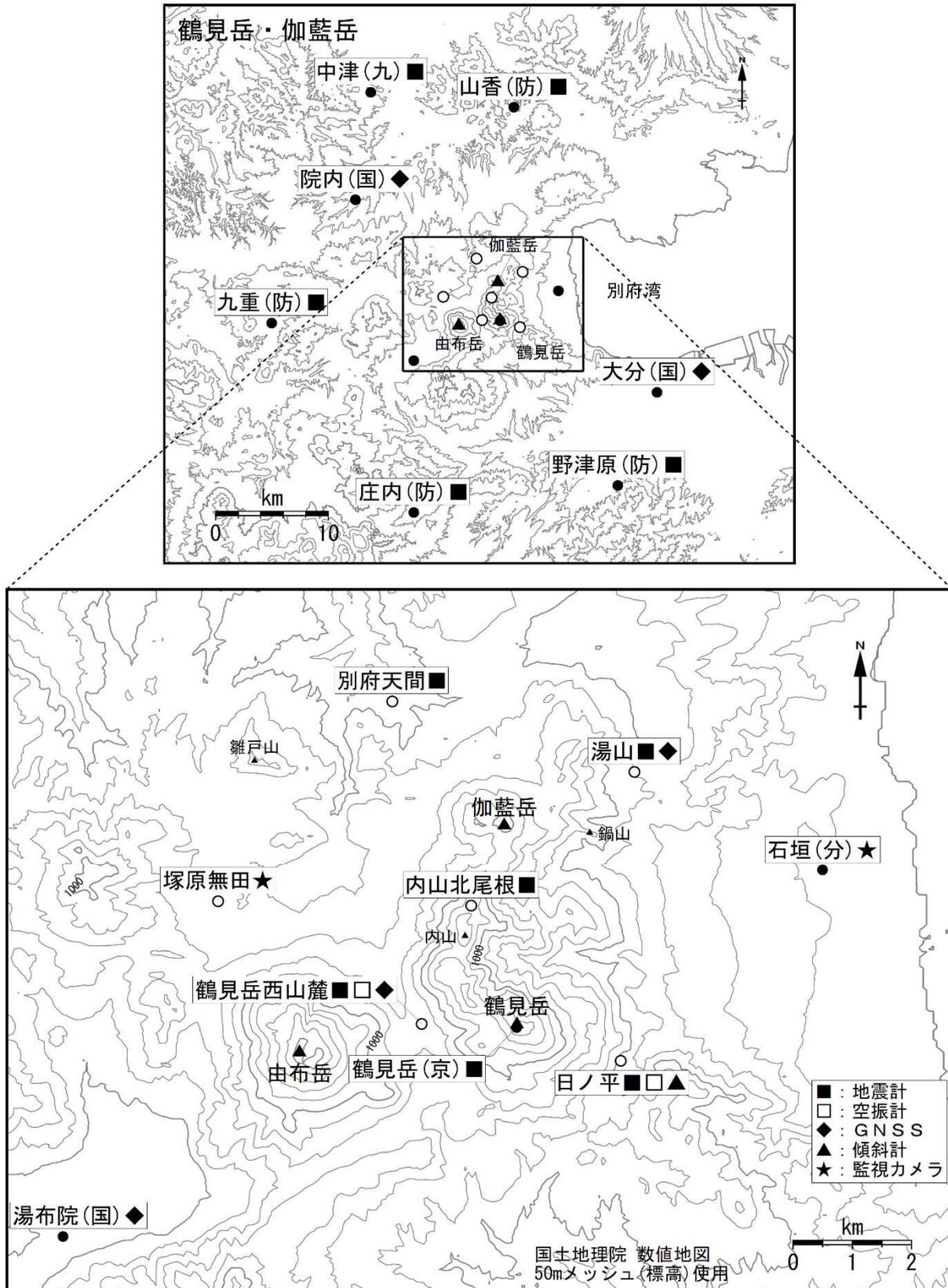


図6 鶴見岳・伽藍岳 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(九)：九州大学、(防)：防災科学技術研究所、(分)：大分県